

## 〈学会参加記〉

## 学会参加記

関根佳恵

昨年、初めての学会報告を経験した。新潟大学で開催された政治経済学・経済史学会の秋季大会でのことで、修士論文の研究発表であった。学会によっては修士課程の院生が発表を行うケースもあるが、私の場合は、大学院で農学から経済学へ転向したため、博士課程に入って 1 年目の昨年在、学外で経験する初めての発表となった。

私の修士論文のテーマは、多国籍アグリビジネス(ドール・フード社)の日本農業参入に関する実態分析である。そのため、自由論題報告では農業経済の会場で報告することになり、問題関心を同じくする先生方に報告を聞いて頂くことができた。私自身、学部時代から農業や食に関心を持っており、専門家が集う場所での発表は、報告を題材にさまざまな情報を得ることができ、多くの刺激を受けることになった。本稿では、この学会報告の体験について書き留めてみたい。

修士論文を 2005 年 1 月に提出してから同年秋の学会報告までの間、私は学会報告の練習とも言える研究発表の機会を 5 回得ることが出来た。最初は、京都大学経済学会の冬季研究集会、次は政治経済学・経済史学会近畿部会の研究集会、続いて現代農政研究会、最後は 2 回にわたる大学院ゼミでの報告である。政経学会の近畿部会や現代農政研究会では、普段接する機会のない他大学の先生方も出席されている。コメントを頂くだけではなく、場の雰囲気慣れるにもよい機会であったと思う。それぞれの場で頂いたコメントを受けて、レジュメの手直しが続いた。

その際、最初に悩んだのは配布資料である。先生や先輩の体験談から、レジュメ形式と論文形式があることを知った。さんざん迷った末、中間物のようなものを作ってしまったこともあったが、今回の報告では、政経学会で見慣れているレジュメ形式のものにした。次に問題になったのは、報告スタイルである。読み上げ原稿を作成するかどうか、やはり迷った。読み上げ原稿を持たないほうが発表としては成熟したものであることは明白であったが、今回は最初の学会報告ということで読み上げ原稿を用意することにした。しかし、ここで重要なのは、聞きやすいペースで、聞き取りやすく読

むことである。私の場合、緊張のため滑舌が悪くなるだけでなく、声も小さくなってしまい、さらにはどうしても読むスピードが早くなってしまうのに苦心した。

以上は、学会報告の準備の中で私自身が特になくなったことである。こうした点は、さまざまな場で準備報告を重ねることで、改善できたと思う。また、準備報告の利点で最も大きかったのは、学会報告前の 7 月に急遽、追加調査を行うことができたことである。この調査は、準備報告で受けたコメントがなければ実施しなかったものであり、秋の学会に向けて内容面で重要な準備となった。

学会当日はあいにくの雨だった。レジュメが濡れないようにかばうようにして歩いたのを覚えている。前日は緊張のため、ほとんど眠ることが出来なかった。報告会場は予想以上に広く、30 余名の方々が聞きに来て下さったが、わずかに期待していたマイクはやはりなかった。このような調子で、私は自分の報告のことで頭がいっぱいになっていたため、司会を引き受けて下さった先生にあらかじめレジュメをお渡しすることを忘れてしまっていた。その後、非礼をお詫びしたことは言うまでもないが、私の報告を聞いて、その場でいくつもの質問を寄せて下さった司会者の先生には心から感謝している。しかし、練習の甲斐なく報告制限時間よりも早く報告を終えてしまった私に、質問を寄せて下さったのは司会者ばかりではなかった。フロアからも、数名の先生に質問やご指摘を頂くことができ、充分に応える力はなかったが、その後の議論は懇親会へとつながれた。やはり、同じ農業経済を専攻していても、専門とする領域や地域が異なると、同じ事象に異なる角度から光を当てることが出来るもので、私は他大学の先生方のご意見やご感想から実に多くのことを学ぶことが出来た。

私の初めての学会報告はこのように過ぎていった。発表までを見守り、多くの意見を寄せて下さった先生やゼミ生に感謝している。初めての発表ただけに、後に生かしたい失敗も多かったが、このときの緊張感と準備にかけた時間は、学会発表にとって大切なことだと思う。しかし、「エントリーをしてから報告内容を考える」というベテラン研究者への道は速いものの、次の学会報告に向けて、早くもこの初心は試され始めているような気がしてならない。

(京都大学大学院経済学研究科)